

Title	女性記者・安武誠子を追って：満洲引揚げと熊本での生活再建
Sub Title	追寻女性记者安武诚子：満洲遣返与在熊本的生活重建 Following female reporter Nobuko Yasutake : repatriation from Manchuria and rebuilding her life in Kumamoto
Author	大石, 茜(Ôishi, Akane)
Publisher	「満洲の記憶」研究会
Publication year	2024
Jtitle	満洲の記憶 No.10 (2024. 12) ,p.144- 159
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32003001-20241200-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

女性記者・安武誠子を追って —満洲引揚げと熊本での生活再建—

大石茜

本解題で紹介する安武誠子（以下、誠子）は、敗戦時の「満洲国」（以下、括弧省略）において満洲日報社の記者であった。佐藤仁史ほか編『崩壊と復興の時代—戦後満洲日本人日記集—』（東方書店、2022 年）に 1945 年 1 月 1 日から熊本へ引揚げるまでの日記を収録し、また『満洲の記憶』9 号（2023 年）には、引揚げから 1946 年 12 月 31 日までの日記を掲載した。今号（『満洲の記憶』10 号）では、それらの続きである 1947 年の日記を収録した。この日記の後ろに記載されていたメモについては、次号に掲載予定である。「満洲の記憶」研究会と日記との出会いについては、佐藤仁史ほか（2022）を参照されたい。

本解題では、これまで掲載してきた日記を踏まえ誠子の経歴を紹介し、引揚げ先の熊本の状況を確認した上で、1947 年の日記の内容を解説していく。

1 安武誠子の経歴

誠子は 1900 年に熊本県菊池郡岩本村に生まれた。山口家の第三子であり、姉・つる枝、兄・豊稻、誠子、弟・巖、偽象の 5 人兄弟である。両親は共に旭野小学校の教員で、父は校長まで務めた。菊池は豪農で知られる地域であ

る。明治10年代から豪農を中心に農事改良が進められ、特に水稻栽培技術の改良が進み、県外へも指導者を派遣するほどであった¹。誠子のその後の学歴を踏まえると、山口家は菊池における裕福な家庭であったと考えられる。当時の屋敷跡は現在でも岩本に残っているという²。

誠子は小学校を卒業した1913年、熊本市にある^{しょうけい}尚綱高等女学校へ進学した。尚綱高等女学校は、1888年に^{せいせいこう}済々黌³附属女学校として設立された、熊本の歴史ある女学校の1つであり、1891年に尚綱女学校として済々黌から独立し、1896年に尚綱高等女学校となった。『熊本県史』によれば、同時期に設立された女学校として、キリスト教系の熊本英学校附属女学校（1888年設立、前身は1887年設立の熊本女学会）があり、尚綱高等女学校及び熊本英学校附属女学校は、「まだ県立女学校の設けのない時代に、本県女子教育のさきがけとして果たした役割は、まことに大きく、卒業生の多くは小学校の女教員として教育界に貢献した」とある⁴。尚綱高等女学校は、熊本における女子教育の嚆矢であり、熊本各地から多くの志ある女性たちが進学し、卒業後は教員等として活躍したようである。誠子の入学した年は、入学者数が179名であり⁵、多くの女子学生たちが通っていたことがわかる。誠子が熊本に引揚げた1946年の日記には、尚綱女学校の恩師や友人たちとの交流、同窓会への参加が記されており、愛着をもつ母校であったことがうかがえる。

女学校を卒業した1917年には熊本県女子師範学校に進学し、卒業した

1 菊池市史編さん委員会『菊池市史』下巻1986年、574-587頁。旭志村史編纂委員会『旭志村史』1993年、690-707頁。旭野村は、戦後に新設合併し旭志村となり、現在は菊池市となっている。

2 2024年9月25日、加藤春千代氏からのメール。

3 済々黌は、1879年に設立された熊本で最も古い高等学校である。当初は同心学舎と呼ばれ、1881年には同心学校となり、東アジアとの関係を重視し、当時より朝鮮語や中国語を学ぶ教育課程が特徴であった。1882年には済々黌と改名し、1901年には県立中学済々黌となった。

4 寺本広作編著『熊本県史 近代編2』1962年、637頁。

5 濱田松次郎『熊本県尚綱高等女学校沿革史』熊本県尚綱高等女学校、1938年、14頁。

1919 年には上京し、東京女子大学へ進学する。姉は東京女子高等師範学校、兄は慶應義塾大学を卒業しており、東京への進学に強い憧れを持っていたことは想像に難くない。女学校卒業後に東京へ進学しなかった理由は定かではないが、弟も上京せずに熊本中学校、第五高等学校（現・熊本大学）に進学していることを踏まえると、経済的な理由があったのかもしれない⁶。

東京女子大学人文予科に進学したものの、卒業したかどうかは定かではなく、東京女子大学の同窓会名簿では名前を確認できなかった。1920 年には、誠子はさらに日本大学専門部社会科に進学した。

誠子が進学した大正期の日本大学に通った女子学生については、三宅守常「日本大学の女子卒業生黎明期の群像―第 1 回卒業生河内いね女史・第 2 回卒業生花木チサヲ女史をめぐって―」（『鬢誌』19 号、2024）に詳しい。三宅によれば、日本大学は 1920 年 8 月に女子学生の募集を開始しており、私立大学では同年 5 月に女子学生の募集を始めた東洋大学に次いで 2 番目の早さであり、また入学者数は他の官立、私立大学と比して群を抜いて多く、初年度に 70 名を超えていた。ただし、女子学生の入学が許可されたのは、専門部及び高等師範部のみで、女子学生は正科生ではなく聴講生の扱いであったという。誠子の進学した専門部とは夜間部であり、女子学生の大半がいわゆる職業婦人として昼間は働き、終業後に大学へ通っていた。三宅の紹介している女子学生の事例をみると、師範学校を卒業し教員として働きながら通学する女性は多く、誠子の経歴とも似通っている。

誠子は、日本大学で学ぶ傍ら、福祉関係の仕事をしていた。どのような仕事であったか詳細は不明である⁷。仕事を通じて知り合った朝鮮人男性と意気投合し、親しい関係になり、1923 年 7 月に長子となる晶之介を出産した。入籍することが周囲から認められないなか、同年 9 月、関東大震災の際に朝鮮人虐殺事件が起こり、危険を感じた男性は朝鮮半島へ帰り、その後日本へ

6 2024 年 9 月 25 日、加藤春千代氏からのメール。

7 当時は学生セツルメントが盛んな時代であるが、日本大学の学生セツルは確認できなかった。

戻ることはなかったという⁸。

晶之介は、誠子の両親の子どもとして戸籍に入ることとなった。当時大連にいた姉を頼って、誠子と晶之介は大連へと渡った。大連にて誠子は、満洲日報社で働き始めた。この時期に、小学校の同級生である安武柳條（以下、柳條）と再会し結婚することとなる。当初は柳條の母、子井が結婚に反対しており、1930年頃によく結婚が認められたようである。柳條の父は旭野村の村長だったが、この頃にはすでに亡くなっている。1930年に生まれた男児・奈翁^{な おむ}は幼くして亡くなったが、1935年に次男春千代、1936年に三男文緒が生まれた。1927年に柳條が香港大学に1年間留学した際には、誠子も共に香港へ行き、香港日本人学校で教鞭を取っていた。柳條は1935年頃から満洲国官吏（通信部）へと転職し、柳條の満洲各地への転勤に伴い、誠子、晶之介、春千代、文緒、柳條の母である子井も共に引っ越しを繰り返した⁹。誠子は新聞記者の仕事の続け、1938年には新京、1941年には哈爾濱に、1943年再び新京に戻り満洲日報社で活躍した。

佐藤仁史ほか（2022）に掲載した敗戦前の日記（1945年1月から8月）を見ると、誠子の記者としての仕事ぶりがよくわかる。一般的に女性記者は、家庭欄や教育、福祉関係の記事を担当することが多いと言われるが、誠子は満洲国の政治や経済に関わる取材も担っており、他の男性社員と対等に取材に出かけている。日記からは、女性記者として第一線で活躍していたことがうかがえる。

1945年8月9日ソ連侵攻時、晶之介は東京にいたが¹⁰、誠子、柳條、子井、春千代、文緒は新京にいた。空襲の被害状況等、記者らしい記録が日記には

8 2024年9月25日、加藤春千代氏からのメール。

9 遠縁の親戚である春子も同居し、家事等を手伝っていた時期がある。敗戦時、春子は哈爾濱にいた。

10 晶之介は誠子と共に大連に渡ったが、新京中学校在学時に熊本の第五高等学校（現在の熊本大学）に合格し、熊本に渡った。その後東京大学へ進学し、1945年に卒業した。（佐藤仁史ほか編、前掲書、145頁。）

残されている。会社から、安東へと疎開するよう指示され、数日かけて家族で安東に向かい、途中草河口で敗戦を迎えた。安東へ疎開してからも、会社の調査班に加わり、たびたび新京等へ調査にでかけている。満洲に残された日本人女性たちが、ソ連兵等からの暴力を恐れながら生活している時期に、誠子が各地で取材を重ねていたことには驚かされる。1946年2月には家族で新京に戻り、誠子は長春日本人会西陽地区会救済班で、避難民の救済活動等に携わった。日記には、困窮した日本人たちの就職斡旋などの記録が残されている。

1946年7月、長春からの引揚げが開始された。誠子たち一家は7月21日に葫蘆を出港し、26日に山口県仙崎港に上陸し、熊本県菊池郡旭野村伊萩へと帰ってきた。

2 熊本における引揚者

周知のように満洲及び北鮮からの引揚げは、他の植民地・占領地と比べ大幅に遅れており、満洲や北鮮で敗戦を迎えた家族等の身を案ずる人は多かった。熊本を含め各地で早期引揚げを求める市民運動が起こっていた。その1つである在外父兄救出学生同盟は、内地で敗戦を迎えた学生たちによる組織で、外地に残された家族の引揚げ促進を求めて結成された。1946年1月5日の熊本日日新聞では、「楽しき新春も飢ゑと寒さに呻吟してゐる在外同胞を一日の早く救出しようと活発な運動を展開してゐる在外父兄救出学生同盟では市民がお正月と遊び浮かれてゐるとき“海外に在る同胞を救ひませう”と寒風の中に叫び続けてゐる」と写真付きの記事で報じている。在外父兄救出学生同盟が、熊本でも盛んに運動していたことがうかがえる。また1月10日には、東本願寺会館（熊本市）にて、在外同胞援護会の大陸引揚者連絡熊本県事務所によって「在満鮮同胞救援熊本県民大会」が開催された。告知文では、敗戦後の満洲や北鮮に取り残された日本人の状況を案じ、また政府が何ら効果的な保護救済を打ち出せない状況を嘆き、「今や残サレタル援護ノ道ハ広ク国民ノ世論ヲ喚起シ、正義人道ヲ為業シ世界ノ平和、人類愛ヲ

以テ立テル連合軍ノ主班タル米國ニ訴ヘ国民ノ声ヲ以テ同胞二〇〇万ヲ救済スルノ外策ナシと信ズ」と訴えている¹¹。なかなか進展しない満洲や北鮮からの引揚げを求める声は、熊本においても大きくなっていった。

4月後半になると、満洲や北鮮からの引揚げが開始されるという情報が新聞でも報じられるようになる。4月22日の熊本日日新聞には「帰つて来るぞ在満同胞」と大きな見出しで報じられ、また4月24日には「北鮮引揚げに曙光」とあり、その後も引揚げの状況が掲載されている。満洲からの引揚げ船第一陣で引揚げた人々が、故郷熊本に到着したのが、5月18日であった。翌日の熊本日日新聞では「帰つて来た「昭和の浦島太郎」見るも聞くも涙濱満洲引揚げ 熊本県人郷土入り」と写真付きで大きく報じられた。家族等の出迎えのみならず、在外父兄救出学生同盟が熊本駅で出迎えたという。その後も引揚げ船の着港予定や引揚げ船乗船者の熊本県人の人数などがたびたび掲載され、引揚げの進捗が報じられた。

引揚げを求める運動や、引揚げ者の出迎えが話題となる一方で、熊本での引揚げ者の生活は非常に厳しかったようである。『新熊本市史』では、当時の引揚げ者の状況について「わずかばかりの財産をリュックサックに背負って、悄然と帰ったのだが、祖国の風は冷たかった」と記している¹²。また就職状況として、「勤労署窓口からのぞいた引き揚げ者の就職状況は、復員軍人一三〇二人の求職に対して二六〇人の就職、一般引き揚げ者四五一人の求職に対し一三二人の就職で、総求職者に対し一七五三人に対し三九二人である。なお、日雇い労務者九〇〇人の登録に、七二〇人の引き揚げ邦人が労務についている」¹³という状況で、失業問題は非常に深刻であった。さらに、住宅難や食糧不足、衣類等の不足など、生活における様々な課題が山積していた。当時熊本では、複数の引揚げ者援護団体が活動していたが、引揚げ者の総合的な援護対策機関として、「引揚げ者総連盟」として引揚げ団体を一元化することと

11 「在満同胞救援熊本県民大会」『熊本日日新聞』1946年1月8日。

12 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史』通史編8巻現代1、1997年、364頁。

13 同上。

なり、7月9日に結成式が举行された¹⁴。

満洲で新聞記者としてキャリアを積んできた誠子であったが、熊本での再就職は順調には進まなかった。『満洲の記憶』9号に掲載した1946年の日記には、引揚者総連盟¹⁵へとしばしば足を運び、職を探す日々が記されている。職を探すなか、9月には『熊本バック』という雑誌の創刊に携わる仕事を、誠子は取材をして記事を執筆していたようである。『熊本バック』は、1947年新年号のみ確認できるが、雑誌名の意味や創刊の目的等は不明である。新年号の内容等については、『満洲の記憶』9号を参照されたい。

3 日記について

本日記は、1947年1月1日から始まっており、『熊本バック』の仕事を、得て働きながら、家族と共に故郷熊本で正月を迎えた誠子が、再び仕事を失い、柳條との離婚を決心して上京した時期の記録である。

誠子が携わった『熊本バック』は、熊本県海外引揚者罹災者救済会が母体である「熊本バック社」による出版で、熊本県海外引揚者罹災者救済会会長及び熊本バック社社長は、永島始が兼任していた。誠子の1月17日の日記には、「『熊本バック』を、早く救済会から分離独立したいと、竹森氏や徳永氏と協議。午後、バック社のための『家』を見に行く」とある。社員たちのあいだで、『熊本バック』を熊本県海外引揚者罹災者救済会から独立させようとする動きがあり、移転先を探していたことが確認できる。その後、事態は急変していく。熊本バック社に関する日記は、下記の変遷を辿った。

14 「引揚団体一元化 近く県引揚者連盟結成」『熊本日日新聞』1946年6月12日。一元化されたのは、熊本県外地引揚互助会、華中熊本県人互助会、華北交通熊本県人互助会、華南熊本県人会、山東引揚者熊本県連盟、南京熊本県人互助会、台湾引揚同胞共済会、華北熊本県人互助会、華南熊本県人互助会、満洲引揚同胞興生会、天津引揚同胞会の11団体である。結成式については、1946年7月10日の『熊本日日新聞』で「引揚者総連盟きのふ結成式举行」と報じられた。

15 誠子の日記には、引揚者総連盟ではなく、引揚者連盟と記されている。

1月20日

今日、救済会に辞職願を出すといふ相談が出来てゐたのに、竹森さんたちが来てゐない

1月21日

竹森、徳永氏等顔を出さず、パック社の資金が不調になったのではないか

1月22日

今日も竹森氏は休み、徳永さんはやって来た。例の金策が出来ないらしい。『家』も契約ができないし、(二月号)も出せないし、社長はサラリーを出さぬといふし、何にしても困ったものだ

日記では、その後も誠子はたびたび出社するものの会社には誰もおらず、事実上廃業したものと思われる。2月9日には『熊本パック』未だ結着を見ず、困ったものだ」とあり、事態はなかなか着地点を見出せなかったようである。『熊本県史』によれば、1946年には熊本でさまざまな雑誌が創刊されたが、すぐに廃刊となるものも多かったという。1946年創刊の『熊本文化』(2号で廃刊)、『モダン九州』(3号で廃刊)等が挙げられている¹⁶。『熊本パック』も同様に、創刊後まもなく経営が立ち行かなくなったようである。

雑誌の職を失った誠子は、再び就職先を探し始める。2月5日の日記には、救済会に辞職願を出し、九州婦人新聞や厚生省に送る履歴書を準備する様子が記されている。

4月に入り誠子は、県外での就職や離婚を現実的な選択肢として考え始めたようである。日記をみると、3月末まで、柳條の開拓地探しに関する簡単

16 前掲『熊本県史』、566-567頁。

な記述が継続的にあるものの、今後の生活について二人の間でどのような相談があったのかは見えてこない。3月31日には「何もかも独りぎめにする夫の勝手さ不快なり、わりきれぬ気持」とあり、さらに4月に入ると柳條との意見の食い違いや夫婦喧嘩の記載が見られるようになる。4月6日の日記には、夫婦喧嘩についての記述と共に「つひに来るとこまで来たやうな気がする。何より子等のことで心痛む」と記しており、離婚や上京を暗示している。柳條は就農を検討していたものの土地は見つからず、また農業経験のないことから周囲からの反対もあり、結果的には熊本県庁外事課の嘱託職員の職を得ることとなったという¹⁷。熊本を去ることを決心した誠子は、4月23日に熊本を発ち、東京へ向かった。

当時、東京には姉がおり、また晶之介も東京で働いていた。春千代と文緒を連れて、二人を頼っての上京であった。柳條は承知していなかったようで、東京に到着した日には「ノブコカヘセ」と電報が届いている(日記4月26日)。

誠子は東京に着くと、早々に転校の手続きを始めている。4月30日に書類を渡しに学校を訪れ、5月1日には春千代と文緒は登校し、それぞれクラスで紹介されている。このときすでに離婚を想定しての上京であったことがうかがえる。

たびたび柳條から電報が来ており、6月8日の日記によれば、姉と晶之介と相談し熊本にいったん戻ることを決めたという。「熊本へかへることがとても辛いけれど、姉さんもいよいよ厄介さうだし、住居も金もないのだし、仕方がない。とにかく一応熊本へかへってキッチンと話をつけよう。だが、いやだ、ホントウに」と心のうちを綴っている。6月12日の日記には、厚生省関係者や、「満日」及び「内外新聞」の関係者と会い、「引揚者全連」へ行き、「仕事のこと、住居のこと、いづれも見当ついてうれしい」とあり、今後の見通しが立ったことがうかがえる

誠子は6月21日に東京を発ち、いったん熊本へ帰った。その後の日記は、

17 佐藤仁史ほか編、前掲書、145頁。

部分的に切り取られており、離婚に関わる記述が本人によって処分されたものと思われる。この時期の帰省で、柳條との離婚や東京での生活について話が固まったのだろう。8月16日には熊本を発ち、東京へと戻ってきた。

6月には見通しがついていたはずの東京での生活であったが、住居は思うように決まらなかった。引揚者住宅等の情報を聞きつけては尋ねてみるものの、契約できずに落胆する日々が続いた。何度も「引揚者全連」に掛け合うものの、状況は進展しなかった。9月21日の日記には「ひどく疲れて、何をするのもユーウツなので、ブラブラと過ごす」とある。心身共に疲れ切っていたことが想像できる。

その後しばらく日記は書かれていなかったが、10月7日に出版社記録が残されている。10月には就職が決まり、働き始めたようである。この時期どんな仕事をしていたのか、定かではない。1949年の『厚生時報』には、誠子が執筆した記事が確認できるが¹⁸、この時期にはまだ厚生省へ就職していなかったようである。また、就職後はほとんど日記が書かれていない。新生活に多忙で、日記を書く余裕すらなかったのだろうか。

図1は、1947年11月3日の誠子の誕生日に撮影された写真である。最前列の少年は、左が三男・文緒、右が次男・春千代で、二人の兄である晶之介が中央に座っている。2列目左側の男性は、晶之介の旧友で日記にも登場する大串氏、右側の女性は誠子の姉・つる枝である。後方中央に立っているのが誠子である。当日の日記によれば、この写真は晶之介の旧友である大橋氏が撮影した。この時期、誠子たち親子は青梅線小作駅付近の引揚者寮に住んでおり、写真の撮影場所である多摩川の河原に出掛けるのには便利だったという¹⁹。

18 「宮田重雄氏にきくフランスの夜の女たち」『厚生時報』4巻9号、1949年。「安心して医療をうけるには」『厚生時報』4巻10号、1949年。「生活協同組合のぞ記」『厚生時報』4巻11号、1949年。

19 2024年10月10日、加藤春千代氏からのメール。



図1 1947年11月3日 誠子の誕生日（アルバムより）

加藤春千代氏所蔵

満洲にいた頃の日記には、キリスト教会に通った形跡は見られないが、熊本に引揚げてからは、しばしば教会の礼拝への出席や、聖書の貸し借り、牧師の名前など、キリスト教との関わりが見受けられる。女学校時代の友人である高浜貞子がクリスチャンだったようで²⁰、貞子と共に教会に出入りしていた。先の見えない生活の続いていた時期、教会は誠子にとって一つの拠り所になっていたのかもしれない。すでに両親は他界し²¹、頼れる姉は東京におり、熊本での生活の精神的支えを必要としていた可能性は想像に難くない。1946年秋に熊本パックで仕事をし始めた際に誠子は、熊本市京町の高浜家の隣家の2階3畳間を借り、母子3人で居住していた。貞子は、熊本生活のさまざまな面で支えとなった友人であった。

20 2024年9月25日、加藤春千代氏からのメール。

21 1945年10月10日の日記に母の命日とあり、敗戦前にすでに他界していたことがわかる。父親については、1946年7月に引揚げた際に、訃報を受け取っている。

また母校の尚綱高等女学校は、引揚げてきた誠子を暖かく迎えてくれる場所であった。引揚げ後の1946年の日記をみると、同級生と共にたびたび尚綱高等女学校を訪ねたり、恩師との再会が確認でき、母校は折に触れて訪ねたい場所だった。1947年の本日記にも、尚綱高等女学校はたびたび登場する。特に、2月と3月は尚綱高等女学校のイベントが続いている。

2月23日（日） 尚綱校学芸会（公開）

十時頃から、貞子さんと文坊と3人で尚綱校へ出かける。（中略）学芸会は、メーテルリンク作の劇「青い鳥」、独唱「シューベルトの子守唄」、モーツァルトの「セレナード」、ダンス、日本舞踊と、四つだけ見て、午後は、すっかり食堂で立ちつづけたが、手伝の人も大てい学芸会へばかり行ってしまふので、ずい分忙しかった。お汁粉五円、ケーキと紅茶十円、全部で、五、六千円の売上になったらしい。

同級生の高浜貞子と文緒と共に出かけ、学芸会を鑑賞しつつ、行事の手伝いをしている。また3月1日から尚綱高等女学校のバザーがあった。

3月1日（土）バザー

九時半頃から貞子さんと尚綱校のバザーのお手伝いに出かける。食堂は若い卒業生や研究科生で人手がある様子。売場へ行って手伝ふ。宮原さんは下駄、井上しかさんは下駄の緒を出品してゐる。頭が痛いので、三時頃失礼して、貞子さんと鬼木さんに会ってかへる。

卒業生として同級生たちと共に積極的に母校の行事に関わっている。人生の帰路に立たされていた時期に、母校の行事を熱心に支援し、懐かしい友人たちとの交流があったことは、誠子にとって慰めとなっていたと思われる。

女学校の同級生であり仲の良かった谷山翠は、1939年まで奉天にいた。尚綱高等女学校の奉天支部の支部長を務めるなど、奉天近隣にいる同窓生の

取りまとめをしていた。同窓会誌によると、1939 年 3 月に奉天支部会にて、谷山一家の送別会をおこなった。「御主人様女学校を勇退なされ熊本にお引揚げになるので送別会を兼ねて同窓会を開きました」と報告されている²²。夫が女学校の教員をしていたようだが、この頃に辞して熊本に帰っていた。引揚げ後の熊本の日記にはたびたび谷山翠が出てくる。同じく満洲で過ごした経験のある同級生として、誠子にとって頼れる存在であったと思われる。

引揚げ後の日記にたびたび登場する尚綱高等女学校の恩師たちは、誠子にとって頼れる存在であったようである。1946 年の日記では、恩師の一人である築山八千代を度々訪問し、永田喜久とも会っている。戦後の同窓会誌のクラス会報告にもたびたび名前があがっている恩師は、築山八千代、萱野千賀、永田喜久である。『熊本県尚綱高等女学校沿革史』によれば、1938 年当時、すでに築山は 29 年 7 ヶ月在職しており、永田は 20 年 10 ヶ月在職とある²³。築山は明治の終わりから、永田は大正期から長く奉職した教師であった。

これらの恩師たちの経歴をみると、当時先駆的であった女子教育機関で学んだ才女たちであったことがわかる。築山は、熊本県高等師範学校女子講習科の第 2 回の卒業生（1898 年卒業）で²⁴、1906 年に熊本で初めて県立の女学校（第一高等女学校）が設立された際には、「女高師出身新進気鋭の」²⁵教員として抜擢され初年度から着任している。その後、尚綱高等女学校に移り、数学と体操を受け持っていた²⁶。女子師範創立 20 周年の際には、卒業生総代として祝辞を任されており、優秀な卒業生であったことがわかる²⁷。熊本県教育会から表彰されたこともあった²⁸。晩年、70 代の頃に病気で寝たきりに

22 花桜会『尚綱』41 号、1939 年、74 頁。参加者に誠子の名前は見当たらない。

23 濱田松次郎、前掲書、117 頁。1938 年 10 月現在の情報である。

24 熊本大学教育学部編『熊本師範学校史』1952 年、582 頁

25 熊本県教育会編『熊本県教育史 中』臨川書店、1975 年、675 頁。当時は未婚で富田八千代。

26 尚綱学園編『尚綱七十年史』1960 年、87 頁。

27 熊本大学教育学部編『熊本師範学校史』1952 年、190 頁。

28 前掲『尚綱』41 号、8 頁。

なった際には、同窓会誌に「築山八千代先生御見舞金募集」と記事が出ており、数えきれないほどの卒業生からの寄付金が集まった²⁹。また、夫である築山与伝も長く尚綱女学校に奉職し、理事を務めた人物である³⁰。夫婦共に、生徒たちから慕われる教師であった。

萱野千賀は、1895年に尚綱高等女学校を卒業し、東京女子高等師範学校で学び、1902年から広島高等女学校に勤務していたが、尚綱高等女学校の校長である内藤儀十郎の要請で、母校である尚綱高等女学校へ務めるようになった。その後再び上京し、東京帝国大学にて聴講生として学んだ。1907年からは学習院講及び上野高等女学校で働き、再び母校へと招聘され、1908年から1923年まで尚綱高等女学校に務めた。その後は県立第一高等科教諭になったという。1972年12月に94歳で逝去となった³¹。

永田喜久もまた、尚綱高等女学校の卒業生である。卒業後は熊本市内の小学校の教員になったが、1912年には卒業生の中から抜擢され、尚綱の裁縫科担任となった。一時退職したが復職し、裁縫科主任、クラス担任、寄宿舎の寮母等、約40年奉職した。1972年2月に80歳で逝去された³²。恩師であり、教育界で活躍する女性の教師たちは、卒業生にとっての憧れであり、また人生の岐路において良き相談相手であったのだろう。

29 花桜会『尚綱』50号、1954年、30-33頁。

30 尚綱高等女学校の創設者である内藤儀十郎が、与伝の姉婿にあたる。与伝は1876年に熊本市内で生まれ、済々黌を卒業したものの体調が優れず、進学することが叶わなかった。済々黌の天草分校の博物教師となり、内藤の招きにより尚綱高等女学校の嘱託の理科教師となった。その傍ら、第五高等学校（現・熊本大学）の博物学助手、熊本中学校博物教授方（嘱託）を務め、独学にて師範学校、中学校、女学校の動物生理の教員免許を取得したという。免許取得後、1906年に熊本中学校の教師となり、1909年に尚綱高等女学校の専任の教員となった。築山夫妻は、卒業生にとって第二の父母のようであったという。（花桜会『尚綱』56号、1960年、9頁。）

31 花桜会『尚綱』68号、1973年、38-39頁。

32 同上、39-40頁。



築山八千代先生



萱野千賀先生



永田喜久先生

(花桜会『尚綱』70周年記念号、1958年及び、同68号、1973年より。)

失業や離婚といった大変辛い経験の重なった時期であるが、誠子にとって子どもの存在は大きかった。引揚げ直後は郷里である菊池郡旭野村に居住していた誠子一家であるが、熊本パック社で仕事を始めた1946年秋、誠子は熊本市内に部屋を借り、子どもたちも熊本市内の小学校に通っていた。柳条は菊池と熊本を行ったり来たりしていたようである。1947年3月に春千代が小学校を卒業すると、子どもたちは菊池に戻る事となり、4月1日には「子等のゐないわびしさ」、翌日にも「さびしい日」と綴られている。前述のように、離婚を考えていると思われる4月6日の日記では、子どもたちのことを考え、心を痛めている。日記には、子どもたちの学校行事や子どもの体調、子どもと過ごした休日の記載も見られ、働く母としての日常生活が伝わってくる。上京してから、5月20日には「昨日持ちかへった晶之介のカケブトンの皮などを洗ふ。ボロボロで大変。午後、アイロンかけ」とあり、23日には「晶之介のカケブトンの仕立直しで、夜おそくまで頑張る」と書かれており、大人になった息子の布団の手入れをしている。母として子どもたちの生活を気かけ、世話を焼かずにはいられない誠子の姿が浮かんでくる。日記はないが、その後1948年2月に柳条が上京し、離婚について再度協議し、

次男の春千代は柳条が、三男・文緒は誠子が養育することとなった³³。我が子との別れは、さぞかし辛いものであっただろう。柳条は春千代を引き取り、熊本県庁で働き始めた。人事課の記録によれば総務課外事係嘱託であった。

夫婦それぞれの生き方は、個人の問題ではあるものの、誠子と柳条にとって敗戦及び熊本への引揚げが、人生の大きな転換点であったことは言うまでもない。満洲国が傀儡国家であったとはいえ、敗戦に伴う世界観の転覆を経験し、職を失い、住み慣れた地を離れて生活を再建することは、一市民にとって非常に大きな爪痕を残す。

満洲の大都市から熊本という地方へ引揚げ、子育てをしながら職を探し、生活を整え、戦後の日本を生き延びようとするとき、二人の人生は、それぞれ別の方向へと進んでいった。女性記者として第一線で活躍し、キャリアを積んできた誠子にとって、戦後の熊本にはその経歴を活かせるような仕事なかったことも、大きな絶望であったと思われる。本日記からは、このように敗戦、引揚げという時代の転換期を懸命に生き抜いた女性の姿が垣間見れる。

33 2024年10月10日、加藤春千代氏からのメール。